

〈ブルース、ジャズ、ボサノバから響きコード周辺について〉

ブルースやジャズはそれこそ即興を身上とする音楽の筈ですが意外と音楽活動（音楽療法）における即興では通常的に使用されることは少ないようです。何故でしょう???

ブルースから派生した音楽は、ソウル、リズム&ブルース、ジャズ、ヒップホップと多様化しており、今となっては一言で括ることはとても困難ですが、私たちがブルースと認識する音楽的要素は、基本的に下記の3点が挙げられます。

- ①C調とすれば、 b ミ、 b ソ、 b シ、のブルーノート(blue notes)を含み、
即興時、ブルーノートスケール（ド・ b ミ・ファ・ b ソ・ソ・ b シ）が合わせやすい
⇒I（トニック）が7th（セブンスコード）、その他IV、Vにも7thを多用
- ②V（ドミナント）→IV（サブドミナント）→I（トニック）、という進行パターンを持つ
- ③3連符系のリズム&ノリ

いずれにしても、クラシック的和声機能とは異なる要素を持つ音楽です。また、ブルースの場合、メジャーコード中にマイナー音（C7のコードのなかで b ミが響く）がぶつかっており、それがブルースな感じを演出したりします。ブルースは、メジャー・マイナー不可分な音楽（メジャーなのか、マイナーなのか、分かり難い）といえるでしょう。

ブルースに関して、実際の音楽療法場面では、比較的若い対象者が嗜好する音楽との親和性からその適応を考慮します。洋楽やロックなどの音楽が好きな人にはヒットするようです。リズムがはねる感じなのでそのままでは集団活動には馴染まぬ感もありますが、通常のI-IV7-I7-V7（C→F7→C7→G7）進行などにしてゴスペルコーラス風にブルーノートを絡めつつ、オルガンなどを用いればそれらしい雰囲気が出せると思います。また、パターン23-①&②では、C調をA調に移調しています。それは、前出のブルーノートスケールを短3度下げれば（移調）、マイナーペンタトニック（ラ・ド・レ・ミ・ソ）+ b ミにすれば、ブルーノートスケールをなぞる事になり、即興演奏時、手軽にブルージーな音世界が展開できます。メジャーブルース（A調）でも、マイナーブルース（Am調）でも、この音設定が、即興時、用いることが出来ます。

さて次は、ジャズについて話を進めます。ジャズは前述のブルースと西洋音楽との融合から20世紀初頭にアメリカで生まれた音楽で、20世紀最大の音楽遺産とさえ言われています。われわれ音楽に携わる者にとっては、大いなる憧れを持って受け止められています。その理由の背景には、なかなかジャズ風にお洒落に奏でることが出来ない（難しい）というジャズ音楽に対してのコンプレックスがそんな想いに繋がっていると思われれます。私もジャズについてはそんなに詳しくありませんし、初心者にも毛が生えた程度の知識しかないと自負(?)しています。ジャズは時代を経るごとに、ラグタイム⇒スウィング⇒モダンジャズ（ビバップ、クール、モード、フリー）⇒フュージョン、とさまざまにスタイルを変えながら発展してきました。さて、ロックといっても多種多様なように、ジャズもまたしかりです。ですが、普通にジャズといって共通にイメージされる音楽的要素は下記の5点が挙げられます。

- ①独特なリズム性（スウィング感） ⇒ブルース同様3連符系のリズム&ノリ
- ②ベースランニング（ウッドベースなあの感じ）
- ③単純な3音構成の和音はあまり用いず、9th、11th、13th、などテンションコード（特にドミナント部において）を多用する
- ④II-V進行（4度進行）の多用（例；パターン26-①）

⇒ | Dm7 | G7 | Cmaj7 | Fmaj7 | Bm(7-5) | E7 | Am7 | A7 |

⑤裏コード（C調におけるドミナントであるG7の代わりにD♭7を使用）や代理コード（例えばCの代わりに構成音の似たAm7を使用）などを用いた一見複雑なコード進行

本法ではジャズパターンを6曲用意しました。いずれも本物のジャズと呼べるほどのものではありませんが、ここら辺りが現時点での筆者的限界でした。ただ、ジャズメンとセッションするわけではないので実際の使用にはたえうものと思われまます。何となくジャズの匂いはするのではないのでしょうか？ジャズは自由な音楽というイメージの反面、制約も多い音楽であると実感しています。ジャズのミュージシャンが聞くと怒るかもしれませんが、ジャズよりポップスのほうが自由度が広くいろいろ遊べるというのが筆者の本音だったりもします。デタラメにピアノを鳴らせばジャズっぽいかもかもしれませんが、ジャズっぽく弾いてみようと思うとなかなか出来ないところがジャズの手ごわさです。そういう意味では、児童寄りの自由即興もジャズでしょうし、提供者が“ジャズという枠”をしっかりと提示するのもジャズです。禅問答のような話ですが本法では取りあえず後者を選択しました。ジャズが音楽療法等の現場で活かされるのは日本の音楽文化を考慮するともう少し先の話かもしれません。

ボサノバは、南米音楽（スペイン・ラテン系）とジャズの融合です。符点系の独特のリズムに乗せて浮遊感を共有するのがテーマといえます。パターン28-①では、ボサノバに特有な(6)9thの和音を取り入れました。

ポップス（ダイアトニック）→モード（非ダイアトニック）→ブルース→ジャズ、とコードパターン即興の旅は続いてきましたが、最終テーマは意外にも“コード機能の崩壊”です。筆者自身がたぶん予定調和の和音の響きとドミナントモーション(V→I)に飽きたのだと思います。当然の結論といえば当然の結末です。パターン29と30では、〈響きコード〉なるものを提案（筆者の造語）してみました。響きコードとは、コード機能を意図的に弱めたコードです。基本的には、

①コードの基本になるをルート音に重ねる3度を抜く

②ペンタトニック（五音音階）をルート音として用いる

という、コンセプトから成立しています。パターン29では、ペンタトニック的響きを構成音として、用いつつも、3度音を故意に外してみました。コード進行（音楽）の流れを支えるものはルート音の流れです。またパターン30のZebraコードでは、黒鍵（左手；ルート音）の響きを頼りに右手でファ・シ抜きペンタトニックを乗せてみました。そして、不協和音として、ルート音と短2度関係にある音を混入させ、不協和音的響きを利用しました。雰囲気としては、現代音楽風の調性の曖昧な不穏で不協和な響きになろうかと思われまます。これはなかなか通常のコードパターンにはない現代音楽的な感じですが、意外にも実際の活動場面でも時折使っています。これら響きコードの提示は、冒頭に述べた『黒いトーンチャイム（ペンタトニック）だけ鳴らして響きを感じましょう！』と、よく音楽活動場面で見受けられる安易な試みに対しての筆者的アンチテーゼと受け取っていただいても構いません（筆者は、創造的音楽活動において非常に有効と考えられるペンタトニックという課題を、提供者が今一度熟慮しながら活動に繋げてほしいと願っています）。音楽とは時間の流れのなかでこそ（いつか終わるかも知れないというせつない感情を伴って；ちなみに人間だけが〈未来＝死〉を予測する能力を持った動物であり、それゆえ、不安、せつなさ、を感じる事ができるとのことです）、美しく響くものであり、時間が止まったままの響きでは心は癒され（救われ）ません。筆者は、〈響きコード〉の先にあるものは何なのか？を目下の課題としつつ歩んでいきたいと考えています。